

金代「紀年」詩考

塩見邦彦*

はじめに

金代(1115～1234)は女真族による漢族支配の時期であるが、詩人たちは前代の宋(960～1279)のそれを引き継ぐかのように、かなりの「紀年」詩を制作している。

この小論では、宋代「紀年」詩との比較を通して、金代という異民族支配の中で、詩人たちが「紀年」詩の世界でどのような変化を見せるのか、あるいは、見せないのかを考えてみようと思うものである。

なお、金詩の底本として使用したのは『全金詩』(全四冊、南海大学出版社、1995刊)である。

—

金代の詩人総数534人、その詩数12066首の中で、「紀年」詩を最も多く残した詩人は元好問(1190～1257)である。もっとも、彼の詩数が他の詩人と比べて相対的に多いせいともいえるが、詩数の多い詩人が必ずしも「紀年」詩が多いというわけではないから、やはり元好問は金代に於いては特異な詩人といえよう。以下、彼の「紀年」詩のうち、五十歳までのものを見てみよう。

三十七年今日過	三十七年 今日過ぎ
可憐出処兩蹉跎	憐れむべし 出処兩つながら蹉跎たり
(除夜)	
三十九年何限事	三十九年 何ぞ事を限らん
只留孤影伴黄昏	ただ孤影を留めて黄昏を伴わん
(長寿山居元夕)	
四十拳兒子	四十にして兒子を拳げ
提孩聊自誇	孩を提きて聊か自ら誇る
(阿千始生)	
四十二年彈指過	四十二年 彈指に過ぎ
却疑行處是前生	却って疑ふ行く處是れ前生
(濟南雜詩五首 其一)	
五十未全老	五十未だ全く老ひず
衰容新又新	衰容 新たに又新たなり

*鳥取大学教育地域科学部 国際言語文化講座

(巳亥元日)

四十九年堪一笑　四十九年　一笑に堪えん
昨非今は可憐生　昨は非　今は是　憐れむべし

(和仁卿演太白詩意二首　其二)

以上、五十歳までに詠まれた元好問の「紀年」詩をみた。しかし、その詩数の多さにもかかわらず、誕生日に詠われる「紀年」詩は皆無である、ということに気づく。

宋代「紀年」詩の特徴の一つに、誕生日(生日)、元日(元旦)、除夜(除夕)によく「紀年」詩が詠われるということがある。⁽¹⁾ また、宋代以前の「紀年」詩においても、誕生日に詠われる詩が多く見られるということに対して、元好問のそれには他の年のものも含めて皆無である。これは特筆されてよいであろう。

ただ、元日や除夜には「紀年」詩が詠われているという点では、宋代「紀年」詩のある部分を彼は受け継いでいると言えよう。ところが、元好問の誕生日での「紀年」詩が皆無であるという事実は、他の金代の詩人にも共通しているのである。金代の詩人は一人として自己の誕生日に「紀年」詩を作成していないのである。

これは金代「紀年」詩の最大の特徴とってよいと思われる。「生日」に、誰も「紀年」詩を製作していない、というこの現象について、今は明確な説明をすることができない。博雅の指摘を待ちたい。

二

元好問の「紀年」詩は一章で見たように、他の金代の詩人に比べて、その「紀年」詩の多さという点において際立つ存在であるが、では、元好問以外の詩人たちは「紀年」詩をどの様に詠っているのであろうか。

以下に元好問以外の詩人たちのそれらを見てみよう。

1) 「紀年」詩一般の特色である『論語』為政篇の十年毎に年齢が詠われることについて

金代の「紀年」詩においては、四十歳、五十歳、六十歳を詠う「紀年」詩は、他の年齢と比較してやや多いと言えるものの、唐代や宋代の十年毎の「紀年」詩の圧倒的な多さに比べれば、少ない。しかも、三十歳と七十歳を詠みこむ「紀年」詩は、金代では全く発見することはできない。何故そういうことなのかは現在不明であるが、推測されることは、異民族支配の下では、『論語』という書物の持つ重みが、かつての唐や宋という時代とは少し異なって認識されていたのではないかと、言うことである。

「三十にして立つ」「七十にして心の欲する所に従ひて矩をこえず」という、あまりにも有名な文句を、いくら異民族支配下とはいえ、金代の知識人たちは当然広く周知であった筈であるから、これは意識的に避けられた結果としか言いようがないと思われるのであるが、今はそのような現象があると指摘するに留めよう。

さて、そのことと関係あるものかどうか、やはり不明であるが、元日や除夜に詠まれるという点では宋代と異なる所はないが、詠み込まれる年齢と言う点から見れば、何か格別記念すべき年齢のゆえとも言えないのである。宋代の様にパターン化されたところからでもなく、何かしら興趣の赴

くまに、自由に詠まれるというのも、金代「紀年」詩のもう一つの特徴と言えようか。以下、それらのいくつかを例挙しよう。

学劍攻書謾自奇	学劍攻書 自奇を謾どり
回頭三十六年非	回頭三十六年の非 ⁽²⁾
(李汾 下第)	
三十八年過	三十八年過ぎ
星星白髮多	星星として白髮多し
(房皞 丙甲元日)	
龍鐘三十九年春	龍鐘 三十九年の春
諱説新年似諱貧	新年を説くを諱むは貧を諱むに似たり
(張秉文 除夜其二)	
行年四十二	行年 四十二
始有此兒子	始めて此の兒子有り
(趙秉文 冬至)	
従頭悉読行年記	従頭 悉く読む行年の記
慙愧春風四十三	慙愧す 春風四十三
(段克己 辛丑清明後三日詩社諸君子燕集於封仲堅別墅・・・・)	
白髮明朝四十七	白髮 明朝 四十七
又随春草一番生	又随ふ 春草一番生ずるを
(麗權 除夜)	

以上、十年毎の間隔では詠われない「紀年」詩を見たが、これらの詩人たちが詠う場は除夜であったり、冬至や元旦であったりする。そして、宋代「紀年」詩との明確な差異は、あくまでも詩人個人の感興をそられるままに詠っているところであり、宋代「紀年」詩に見られるようなパターン化からは自由であると言うことである。

2) 詞の中に「紀年」が詠われることについて

宋代「紀年」詩のもう一つの特徴に、詞にも「紀年」が詠われ、その事は唐代には見ることできない新しい現象として存在すると指摘したことがある。⁽³⁾

この点について金代では如何であろうか。

結論からいえば、この点は宋代「紀年」詩と同様に、金代の多くの詩人によって詞の中に詠まれている。しかも、その趨勢はいささかも衰えてはいない。

人生七十	人生七十
罕希寿数	罕に寿数を希ふも
我今四旬有五	我 今 四旬有五なり
(馬鈺 滿庭芳)	
四十六年彈指過	四十六年 彈指に過ぎ
蒼顔換却春華	蒼顔 春華を換却す

(段成己 臨江仙)

回頭四十七年非 回頭 四十七年の非
 何因松竹底 何ぞ松竹の底に困らん
 茅屋老相依 茅屋老ひて相ひ依らん

(元好問 臨江仙)

四十九年 四十九年
 強半在天涯 強ひて半ば天涯にあり

(段克己 江城子)

伊子癸卯同生世 伊の子 癸卯同じく世に生れ
 不覺流年五十二 覺えず 流年五十二

(馬鈺 惜芳時)

馬風風 馬 風風
 五句六 五句に六
 雲水飄飄 雲水 飄飄
 麗然清独 麗然 清独たり

(馬鈺 情心鏡)

整六十三歲 整に六十三歲
 三月良辰 三月の良辰
 十一日賀 十一日の賀

(王喆 醉蓬萊)

以上、金代の詞に詠われた「紀年」の大体を見たが、これらの詞もその折々の情趣にいざなわれてのものであり、特にパターン化されたものを探し出すのは困難である。

三

第二章で『論語』為政篇の影響が比較的多く現れている年齢は、四十歳・五十歳・六十歳であると指摘した（繰り返すが『全金詩』の中で三十歳と七十歳の「紀年」詩は皆無である）。今、その各十年毎に詠われた代表的な「紀年」詩を、以下に各三首ずつ例挙してみると次の様になる。

- 1) 四十宜未老 四十は宜しく未だ老ならざるべし
 年々添鬢糸 年々 鬢糸を添ふるも

(元徳明 覽鏡)

行年四十著綵服 行年四十 綵服を著け
 悲啼效作兒声呱 悲啼效ひ作す兒声の呱

(段成己 蘇氏承顔堂)

四十拳兒子 四十にして兒子を拳げ
 提孩聊自誇 孩を提きて聊か自か誇る

(元好問 阿千始生)

- 2) 百年今已半 百年 今已に半ば

只合鬪樽前 只だ合に樽前に鬪はん

(李俊民 一字百題示商君祥 身)

倏忽五十春 倏忽 五十の春

相見成老嫂 相ひ見ゆるも老嫂となる

(李俊民 留別李巽之)

百年今已半 百年 今已に半ば

凜凜畏虚生 凜凜として虚しき生を畏れん

(周昂 早起)

3) 年過六秩尚蹉跎 年は六秩を過ぐるも尚ほ蹉跎たり

奈此坡陽婦隱何 此の坡陽の婦隱を何奈せん

(張秉文 坡陽婦隱凶)

六十衰翁更莫間 六十の衰翁 更に間莫く

好將華髮映青山 好し華髮を將つて青山に映ぜん

(杜仁傑 魯郊)

謂我六十翁 我を六十の翁と謂ふも

鬢髮未衰落 鬢髮未だ衰落せず

(元好問 示程孫四首 其二)

以上、夫々四十歳・五十歳・六十歳の「紀年」詩を三首ずつみたが、十年毎に詠われているという事を除けば、ある詩人は人との別れを、ある詩人は訪れた建物での作であったりして、そこに何か統一的な傾向を見出そうとするのは難しい。各々が、各々の感興に促されて「紀年」詩を詠っているとしか言いようがない。そして、このことは当然の事であると受け取られがちであるが、宋代「紀年」詩と比較すると、全くパターン化からは程遠いという金代「紀年」詩の特徴が浮かび上るのである。

先に誕生日・元日・除夜に「紀年」詩がよく詠われるということを述べたが、そのパターン化は宋代「紀年」詩の特徴の一つであって、金代「紀年」詩を見た場合、少なくとも誕生日に詠われる「紀年」詩は皆無であること、また、『論語』為政篇の範疇では括れないこと、という特徴が浮かび上る。これらの特徴は、金という異民族支配と深く関係していると考えられるが、現在の所、指摘するに留めたい。

結論

上に見たように、主として宋代「紀年」詩との比較で金代の「紀年」詩についてそのさまざまな点を見てきたが、以下のように結論づけてよさそうである。

一、金代を通じて最も多い「紀年」詩作者は元好問である。

二、『論語』為政篇を踏まえる十年毎の「紀年」詩は、金詩では三十歳・七十歳については皆無である。

三、宋代では誕生日・元日・除夜に書かれた「紀年」詩がその主要なものであるが、金代では誕生日に書かれたものは皆無であり、元日と除夜に集中する。

四、詠われる「紀年」詩は宋代「紀年」詩のようなパターン化からは比較的自由であり、各詩人の

感興に促されての作が多い。

五、詞の中で詠われることについては宋代と異ならないが、パターン化からは自由である。

これらの結論を見ると、金代「紀年」詩は宋代「紀年」の伝統を受け継ぐ面を見せながらも、前代のパターンにとらわれない新しい面、いわば詩人たちの独自かつ柔軟な発想に従っている面が如実である、と言えるようである。

注

- (1) 「宋代「紀年」詩考」(『寛・松本教授退官記念中国文学論集』立命館大学人文学会 2000)
- (2) この句、恐らく宋代の楊冠卿の「回頭今日笑、三十六年非」を意識する。
- (3) 「陸游「紀年」詩考」(名古屋大学中国語学文学論集第十集 1997)